

# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2012年1月14日

文責：JUN

## 若い教師と反省的実践の経験

### 1 3年目の教師の授業

Aさんは、3年目の教師です。Aさんの学校には7年前からかかわっていますから、わたしは、初任のときから彼の授業を見ていることになります。そのAさんが、昨秋、ほれぼれするような授業をしたのです。

物語を読む授業でした。授業前半の一人学びでは、どの子どもも実に誠実にテキストと向き合って鉛筆を走らせていました。聞こえてくるのは、紙をめくる音と鉛筆で文字を書く摩擦音だけ。まさに集中した「静」の時間でした。それがグループの学びになると一転、実に豊かな表情での対話が始まったのです。言葉が届き、考えが響くというのはこういう状態をいうのだと思うほどの、やわらかく、ふくよかな聴き合いです。

全員による学び合いになりました。子どもが考えを話し始めました。驚いたのは、さほど声量があるわけではないのに、子どもの声がよく通るといことです。しばらくしてそのわけがわかりました。子どもたちは、どの子どもの言葉もほんとうによく聴いているのです。いえ、聴いているだけではありません。出された考えの一つひとつに表情豊かに反応し、それにつなげる考えを次々と語っているのです。つまり、そのように聴いてもらえるから、仲間に届ける声に力が生まれているということなのです。この子どもたちは、みんなで学び合う面白さ・魅力を知っている、わたしはそう思いました。

そして、何よりも驚いたのは、時間がたつほどに、テキストになっている物語の味わいが深まっていったということです。それは上辺だけの学び方をしていただけではないということを表していました。子どもたちは、物語を味わっていたのです。そこまで気づいて、わたしは了解しました。学びを楽しむ気持ち、学びを追い求める気持ちがあるから、これほどまでの姿が生まれてくるのだと。

そこでわたしは、ふと考えました。子どもたちの学びの姿をここまで育て上げたのは、まぎれもなく担任の教師ですが、その教師であるAさんがまだ3年目だったということ。つまり彼にはまだ2年半の経験しかないのです。そんな、経験の少ない若い教師が、ベテランが舌を巻き、多くの授業を見てきているわたしを感激させるような授業をやったのです。興奮したわたしの気持ち、わかっただけでしょう。

でも・・・わたしは考えました。この彼の授業は、どのようにして生まれてきたのだろうか。教師たちの授業づくりを支えることを役割としているわたしにとって、それは知らねばならないことでした。そこに、教師が教師として育つ大切な何かが存在しているに違いなかったからです。

## 2 センスと反省的实践

若くしてこれほどまでの事実が生み出したのは、彼にセンスがあったからだと考えられます。センスは、どのような家族の中で、どのような環境で、だれに、または何に影響を受けて育ってきたかという成育歴がかなり深くかかわって発生すると考えられます。そういうことからして、さほど教師としての経験のない若い人がこれほどまでの事実を出すときには、必ずそういった成育歴に基づくセンスが作用していると考えてしかるべきでしょう。もちろんわたしはAさんについて詳しいことは何も知りませんから、これはあくまでも一般論です。しかし、そう考えることに強い違和感を抱く人は少ないでしょう。

ただ、Aさんの授業のような事実をセンスのありなしだけで片付けるべきではありません。たとえセンスが作用していたとしても、そのセンスは引き出されなければ表面に出ないのだし、そのセンスが発揮できるような状況が生まれるにはそれだけの理由があると思うからです。それはいったいどういうものなのでしょうか。

わたしは、教師の専門性は経験でしか身につかないということをいつも述べています。そして、自分の授業を振り返る経験を持続的・継続的に実行するように訴えています。反省的实践です。それは、何人もの生きた子どもを対象に、それぞれの子どもの状況に応じて学びをはぐくむという教師の仕事にはかなりの職人的要素があると考えからです。職人的資質と技能は経験でしか身につけません。同じようなことを繰り返し実践すること、その実践を常に見つめ直し、見つめ直した結果をもとにまた実践するという愚鈍とも言える行為を繰り返すこと、それ以外に身につける手立てはないのです。そういう意味で、教師の研修は欠くことのできない職業的行為だといえます。

けれども、経験の少ない若い教師がこんな良質の授業を実現することもあるのです。それはわたしが普段述べていることと矛盾しているように見えます。そして、Aさんのような教師には、さほどの深い反省的实践は必要ないのではないかと思われる可能性があります。

結論から言うと、決してそういうことはありません。Aさんにも、これからずっと、誠実で丁寧な反省的实践が必要なのです。そういう経験を怠ってはならないのです。それはどういうことなのでしょうか。

それには、この授業の事実をどうとらえるか、その事実がどこから生まれ、そして、そこにこれからAさんが学ばなければならない何が潜んでいるのかを探り出さなければなりません。そうすることで、若さと経験との関係性を少しは明らかにすることができるのではと思います。

## 3 若い教師が優れた事実を生み出すとき

Aさんほどの授業でなくても、若い教師の居心地のよい授業には、必ずといってよい共通点があります。それは、子どもと教師の関係がよいということです。

子どもと教師の関係性は、教師の技量によって生まれるとは言えないようです。まだそれほどの技量を有していない若い教師が、ベテラン教師がうらやむような意欲に満ちた子

どもがつどう教室をつくりだすことがあるからです。要するに、子どもと教師も、所詮、人間と人間の関係なのです。そこに、信頼感があれば良質の関係が生まれるのです。子どもといることが楽しくてならない教師、どの子どももいとしくてならない教師、困難なことがあっても、子どもとかかわる教師という職業に魅せられている教師なら、子どもへの信頼感は当然宿ります。自分たちのことを愛しい目で見えてくれる教師、自分たちのために夢中になっている教師が自分たちの「先生」なのですから、その教師の思いに子どもたちが応える行動をとるようになるということは、普通に考えられることです。

しかし、それはあくまでも前提です。この前提だけで、Aさんのような授業の事実が生まれるわけではありません。

わたしが注目しているのは、驚くような授業をする若い教師には、明確な憧れがあるということです。これは、若い教師に限ったことではないでしょうが、特に若い教師にはそれを強く感じます。

わたしは、教師が教師として成長するとき、または、これまでの授業を大きく転換しようとするとき、それは、強い憧れを抱いたときか、厳しい挫折に出あったときのどちらかだと考えています。そのどちらでもないときは、どうしても本当には取り組めないからです。

若いときは、これからへの希望で心を満たすことができます。自分がこれからどういう教師になっていくのか、その前途は見えません。見えないということは不安だとも言えますが、プラス思考で考えればそこに大きな可能性があるとも言えます。その可能性に真実味が生まれるとき、それは、具体的な憧れを抱いたときです。憧れこそが若い教師成長の鍵なのです。

若い教師は、その憧れにどのようにして出会うことができるのでしょうか。当たり前のことですが、それは、憧れを抱けるような授業や教師に出会うことです。

Aさんは、わたしが7年もかかわってきた学校に初任者として赴任しました。ということは、そこには、「学び合う学び」に取り組む研修体制が存在し、授業づくりにいそしむ教師が存在し、聴き合い学び合って学ぶ子どもたちがいて、当たり前のように年間何度もの先輩教師の授業を目にすることができたのです。もちろん、彼が目にしたのは、この学校の授業だけではないでしょう。「学び合う学び」を目指す他の学校に出かけることもあったでしょうし、「授業づくり学校づくりセミナー」などの研究会に参加したこともあったに違いありません。大学を卒業し無地で教師になったAさんが、そのような環境と経験のなかで、強い憧れを抱くようになったらうことは想像に難くありません。それは、特定の教師への憧れかもしれないし、ある一つの授業の事実が鮮烈にインプットされたのかかもしれないし、「学び合う学び」そのものへの傾倒であったのかもしれません。どちらにしても、彼は、この学校に赴任したことによって、その憧れを抱くことができたのです。

そういうことを考えると、若い教師がどういう学校に赴任するかということは決定的に大切だと考えられます。もちろん、どの学校に赴任しても、憧れを抱けるようであればいけないのですが、現実にはどの学校も同じようにはなりません。

わたしは、若い教師のためには、どの学校においても、これだと思う多くの授業に出合えるようにすべきだと考えています。校内でそれが実現できないのなら、他の学校に出張させてもいいのです。その機会を保証するのが管理職やベテラン教師の責務なのです。

憧れを抱くのは、若い教師の特権ではありません。中堅にさしかかった教師でも、もうベテランとも言える域に入った教師でも、あるときはっと感じることはあります。いえ、教師は教師である限り自分の技量を磨きたい、子どもの素敵な表情が生まれる授業をしたいと思っているものです。どんな教師にも、憧れは生まれるのです。

ただ、経験を積み積むほど、憧れる授業はそれまで行ってきた授業とかなり距離があるものである可能性が高いですから、その憧れの授業を実現することはかなり難しいものになると考えてよいでしょう。憧れを実現するよりも前に、自分が後生大事にしてきたものを多かれ少なかれ壊さなければいけないからです。もちろん、それを壊したあとに生まれるベテランの授業には、目を見張るものがありますが、そのことは後述することにして、ここは、話を若い教師のことに戻したいと思います。

若い教師は、それほどの苦勞もなく、あっさりとした良質の授業をつくってしまうことがあります。それを目にしたベテランの教師たちはため息をつきます、自分は苦勞してもなかなかできないことを若い人はいとも簡単に実現してしまうと。そして、若いということは可能性のかたまりなのだと思心し、それで自分をなぐさめることになるのです。

しかし、わたしに言わせれば、それは少し違うのではないかと言わざるを得ません。つまり、ベテランになればなるほど壊さなければならないものが巨大化しているのに対して、彼らには、壊すものがないか、または非常に微々たるものなのだと思うからです。そういう意味で、彼らは、憧れに対して何の迷いもなく直進していけるのです。

壊すものがないということは大変な強みです。理想に燃えた若い人がひたむきになったとき、その理想の姿はさほどの苦勞を伴わず生み出せることがあります。それはそれですばらしいことに違いありません。わたしたちは、そうした授業を、心から歓迎し、受け入れ、その教師の取り組みを称えなければなりません。

そのうえで、壊すものがなく実現したものの危うさについても述べておかなければなりません。実は、ここに、若くして優れた授業をつくり出した教師に、どうしても反省的実践による経験の蓄積をしていってもらいたいという理由があるのです。

#### 4 みえていないことの自覚を

それはAさんだけのことではありません。特別な才能のある人はいるかもしれませんが、そういう特例は別にして、おおむねみんなそうなのです。それは、実現した授業に内在する大切なことの多くがまだみえていないということです。みえていないということは、自覚できていないということになります。自覚はないけれど、現実的にはそういう事実は生まれているということなのです。

もちろん、みえていないにかかわらず、子どもたちが豊かな学びの世界を味わっていることは素晴らしいことです。教室をそういう雰囲気にし、子どもたちの意欲をはぐくみながら、豊かな学びが可能な状態にした若い教師のことは、どれだけ賞讃しても過ぎることではないでしょう。

けれども、みえていないということはどういうことなのか、それはどうしても考えておかなければならないことです。

まず、子どもの出してきたもののよさや値打ち、可能性などがみえていないということ

が考えられます。Aさんの授業では、それでも豊かな学びに発展しました。それは、子どもがつないだからです。つないで焦点化し、そこから豊かなものを引き出していったからです。この授業で、Aさんは余分なことをしゃべりませんでした。ひたすら子どもの学び合いを見守りました。そうしてそれは、理想的とも言える「学び合う学び」になったのです。それはそれで実により教師の対応だったと言えます。

けれども、そのようにして子どもたちが具現化していった学びが、どんなにすごいものなのか、そこにどんな学びが存在していたのかを本当に知らないといけないのです。それは、さらに「ジャンプのある学び」を目指すときにどうしても必要になることだからです。

もっとみえにくいものがあります。それは、子どもの考えと考えのつながりや、その子どもの思考のつながりがテキストや課題とどうつながるのかといったことです。それは、子どもの発言一つひとつの理解ではすみません。そこには、考えと考えの何がどう関連しているのか、そのどこに子どもは気づいているのか、しかも、それに気づいている子どもはどれくらいいるのか、また、その気づきに多くの子どもが関心を示したのか、そして、そのつながりの先にどういう学びの可能性がみえるのか、そういった多元的な関係性がみえていないということなのです。

さらに難しいのは、思いもかけない考えが出たときです。それが間違いであるときもあります。他の子どもの考えと方向が異なるという場合もあるでしょう。そのどちらの場合でも、その思いもかけない考えにどういう学びの可能性があるのかを察知できなければなりません。それは、場合によっては、教師が出て、方向を定めたり、間違いを否定するのではなく間違いの出所を探ることから学びを生み出せるようにしたりしなければならないかもしれません。

Aさんの授業では、そのような場面は現れませんでした。ですから、じっくり子どもの学び合いを見守り、子どもたちの出してきたことを尊重しながら先に進めていけばよかったのですが、いつもそのように行くとは限りません。

いつ教師が出なければいけないか、それは、子どもの学びの状況が読めなければ判断できません。こういう子どもの状況に応じて出ることを「教師の即興的対応」と言われていますが、それは簡単なことではないのです。それを可能にするために、教師として磨かなければいけないのは、「みえるようになる」ということなのです。

Aさんの授業は実にさわやかでした。子どもたちがやわらかくかかわり合い、そこから豊かな学びが生まれていきました。Aさんは、そんな子どもを信頼して、おだやかに、大切に大切に授業をしました。それはまさに子どもが学ぶ「学び合い」でした。

しかし、だからと言って、子どもの素晴らしさにただ酔っているだけではいけないのです。その子どもの学びがどんなに素晴らしいのか、そこから生まれるかもしれないさらなる可能性について、まだ十分にみえていなかったのですから。もちろん子どもの素敵さは喜ぶべきことです。子どもをどれだけ褒めても褒め過ぎることはないでしょう。けれども、教師である自分は、その先を見なければいけません。そのために大切にしたいこと、それは、みえるということです。その第一歩として、みえていないことを自覚する必要があります。

ですから、わたしは、Aさんのような授業を見せていただいた後の協議会で、その授業の素敵さ、子どもの素晴らしさを述べ、そういう授業をした教師のことを称えながらも、この授業で生まれている学びの事実、つながりの事実を具体的に説明するようにしています。そうした事実がみえることの大事さを次の世代に伝える、それがわたしの役割だと思っているからです。

## 5 見えていて「学ぶのは子ども」を貫くベテラン教師

ところで、ベテラン教師がそれまでの自分の授業を転換して生み出した授業には、目を見張るものがあるということを前述しました。それはこういうことなのです。

ベテラン教師は、これまでにやってきた授業がどういう授業であったとしても、豊富な経験をしてきています。特に、これまでの教師は、教材研究にかなりのエネルギーをかけてきましたし、同じ教材の授業を何度か経験してきていますから、若い教師ではかなわないほどの実践的知識を有していると考えられます。ただ、そのほとんどを教えるために費やしてきたのですが。

「学び合う学び」には、「学ぶのは子ども」という理念があります。そこには、教えられるのではなく、子どもたちが発見する学びが想定されています。とは言っても、どんな場合でも子どもに委ねれば豊かな学びが生まれるというわけではありません。むしろ、その逆です。何人もの子どもがかかわり合いながら学びを遂行するのは子どもだけでは難しいからです。それだけ複雑なことだからです。

そういう複雑な行為を超えて、学びを生み出せるようになるには、教師のかかわりが不可欠です。そのとき、教師に必要なのが、学ぶ内容の先が読めるということなのです。どの子どもの考えにどういう意味があり、その先にどういうことが生まれるのかといった先が読めなければ、子どもの考えは堂々巡りになるだけです。その学ぶ内容の先を読むために、これまでに培ってきた教材への知識や教養が役立つのです。その教材を子どもに当たったときの経験が支えになるのです。つまり、ベテラン教師にはみえることが若い教師より多いということになります。

このように「みえる」ということはベテラン教師にとって有益なことだと言えますが、実際には、その逆の結果を生むことがしばしばあります。それは、往々にして、みえていたがために、子どもがつながり合って発見するよりも前に口を出してしまうことになるのです。つまり、自分の考えた方向に誘導してしまいがちになるのです。

そういう教師は、子どもが間違っただけを言えば、早く是正しなければと焦り、教師の思惑に合うことを言う子どもがいれば、すぐそれを取り上げようと急ぎ、子どもの発言が止まれば、あわてて次々と発問を繰り返してしまいます。つまり、そういう教師にとって「みえる」ということは、そのみえたことに早く対応することに直結しているのです。そこには、「教える」ことから抜け出せない長年の習性が存在しています。

「学び合う学び」の実現には、その習性の乗り越えが欠かせません。それは、子どもの言うことすることがみえていて、そのみえていたことを教師の内に留めて、子どもの学びを見守り、子どもたちによる発見が生まれるように方向づけていくことを表しています。

わたしは、そういう教師の典型として、拙著『学びの素顔』（世織書房）のなかで一人

の教師像を描きました。その一節を見ていただきましょう。

予想外の考えが出ることは日常茶飯事になっていましたから、よし子先生はたいはいのことに驚きません。けれども、これには虚をつかれました。これまで何度もこの物語の授業を見てきたし、過去二回の五年生担任において自分でも授業をしています。けれども、そうした経験において、この祐介のような疑問には一度も出あいませんでした。

祐介の疑問は、よし子先生だけでなく、クラスの子どもたちにとっても意外なものだったようです。彼の発言の後、一瞬教室が静まりました。ほとんどの子どもが探るような目で教科書の文章に目をやっています。当の祐介はそんなみんなの様子を見つめじっと待っています。もちろんよし子先生の頭の中はフル回転、そしてはっと彼の言いたいことに気づきました。彼は、大切にされていたものは雪下駄よりもわらぐつであってほしかったんじゃないだろうか。うん、きっとそういうことを言いたいんだ。けれども、よし子先生は、そのことを言いませんでした。彼の疑問を子どもたちがどう受けとめるか、そしてそこからどんなことが発見をしていくか、そういう子どもたちの学び合いが生まれるのを待つことにしたのです。

「みえた」ことを直ちに「教える」ことに直結させるのはよいことではないのです。そうではなく、その「みえた」ことは子どものなかに「学びが生まれる」ことにつながるのべきなのです。それができたとき、子どもたちの学び合いは大きなうねりを起こし、確かな学びと学ぶ喜びを生み出します。それがどういうものなのかは拙著を読んでいただくとして、ここでわたしが述べたいのは、「みえる」ことの重大さです。

ベテラン教師が、教えることに偏った授業観から「学び合う学び」に舵を切ったとき、もっとも強く感じたのは子どもの素晴らしさだったという話をよくききます。これまで教えなければと思いこんでいたこと、いえ、それ以上のことを次々と発見し語る子どもたちを前に、子どもの可能性の大きさを実感するとともに、そうして到達した学びの豊かさに感動したというのです。わたしは、そのように感じられるベテラン教師はすごいと思います。それは、みえているから感じられたことだからです。

みえていて待てる、みえていて寄り添えるということは、簡単なことではありません。教師は、みえていればみえているほど「指導」したくなるのです。それは、長い間「どう教えるか」ということばかり考えてきたからです。しかし、その衝動を抑えて、「学ぶのは子ども」だと自らに言い聞かせ、学んでいく子どもに寄り添わなければ、「学び合う学び」を実現できないのです。

子どもの素晴らしさ・可能性を実感し感動したベテラン教師は、本気でそれまでの授業から転換しようとしています。そのとき、想像を超えるレベルの学びが生まれるのです。それは、子どもの事実のかなりのことがみえていたからこそ到達するレベルでした。

わたしは、これまでにそういう事実を何度も目にしてきました。もちろんその多くの場合、転換の苦労は避けられませんでした。なかには自己嫌悪に陥るほどの大変な苦労をした人もいます。器用でない人ならなおさらです。何年もかけて築いてきたものを壊すわけですから、それは容易なことではなかったのです。

それでも、挑戦し続けたある教師は、こんなことをわたしに語ってくれました。「あと何年教師ができるかわからないけれど、今、変わらなければきっと後悔します。このまま終わりたいはないんです。どこまでできるかわからないけど、わたしはわたしで納得したいのです」と。

子どもたちの可能性を引き出す一人の教師としての納得を得たいと、悩み、苦しみながら自分に挑戦し続けた教師の授業が、どれほどの重みを持つか、それは言わずもがなのことでしょう。そうして生まれた授業は、単なるセンスだけでは出ない、苦労した人だけが生み出せる世界だと言えるのではないのでしょうか。

## 6 若い教師たちへの期待

若い教師がみえていないのは仕方のないことです。みえていないからと言って、その授業の事実やその教師の対応を否定する気持ちはもうとうありません。むしろ、意欲に満ちた子どもたちの学びをつくり出せたことが素晴らしいと思います。その若さが、さわやかさがまぶしくもあります。

だからわたしは、急いでみえるようにしなさいと言うつもりはありません。ただ、一人の水先案内人として、「みえる教師になる」という道筋は示しておかなければならないと思うのです。この若い教師たちの前には、教師として歩む長い道が広がっているからです。そして、その道のりにおいて、必ず「みえる」ことが求められてくるからです。そのとき、必ず、授業の事実、子どもの事実を見つめ直す「反省的实践」としての経験が必要になるのです。

Aさんのような教師を見ていて、ふと思うことがあります。それは、今、こんな子どもの学びを実現している彼らがベテランになったとき、どういう授業をする教師になっているだろうかということです。それは、教えることへの偏りから転換しようと挑戦した今のベテラン教師とは異なっているのではないのでしょうか。

若くして、学び合う子どもの実像に触れた教師たちが、反省的实践を積み重ね、子どもの学びの深層に分け入ったとき、今のわたしには想像もつかない豊かな学びの世界が広がっているのではないか、そんな思いになります。

Aさんの授業は、わたしにそんな感慨をもたらしてくれました。そして、教師にとって「反省的实践」がどれほど大切かを改めて考えることができました。

いま、学校では、若い教師がどんどん増えています。その人たちに次の時代の学校を任せることになります。どうか、子どもたちとの日々を熱い思いを抱いて誠実に向き合ってください。そのことへのわたしの期待は留まるどころがないのです。